

安芸守定と安芸家（北小路家）

について

北小路 博 央

（序論）

安芸守定が本邦最古の女科専門医として、室町時代初期に多くの業績と伝説的な逸話をのこしていることは、すでに『日本医学史』（富士川游）、『日本女科史』（佐伯理一郎）に『日本医学史』（富士川游）、『日本女科史』（佐伯理一郎）他、いくつかの文献に記載されている。

延文三年（一二五八）、守定が二代將軍足利義詮の側室紀良子の懐妊に際して、無事出産せしめたのが三代將軍義満であったとされている。この功により、尚薬に任ぜられ、以後足利家および宮中の産事を取り扱うことになり、代々その事業を継承した。

その後、四代安芸守宣のとき、文明六年（一四七四）禁中に出した古文書に北小路左京亮と記して以来、北小路姓を名のることになる（当時屋敷のあった地名からとったものとい

われている）。

室町幕府崩壊後も北小路家代々は京都に在住し、安土桃山、江戸、現代に至るまで医業（主として産婦人科、十八代貞綱は内科を標榜、二十一代より当代は外科）を継承した。

現在、当家に現存する古文書や諸家の記述によれば、この間代々の当主が医業を継いだということだけではなくて、医史上興味のあるいくつかの業績をのこしたことを知ることができる。

一、家系図（略）

二、守定の龍神伝説と家伝薬「神仙散」について

龍神伝説については、黒川道祐の『雍州府志』（貞享元年・一六八四）に詳細な記載がある。このとき守定が龍神より授けたとされる秘方が神仙散である。本薬は産前産後薬で一子相伝の秘薬とされ、永禄十二年（一五六九）室町幕府（十五代義昭）よりその専売権を保証する奉行人連署奉書を授けられている。現存するこの文書は、本邦売薬官許の濫觴（『日本女科史』）として評価されている。神仙散は明治の頃にも、なお家伝薬として市中で売買されていた記録がのこっていて、その処方、効能書も現存する。

三、「安芸家御産所日記」について

永享三年（一四三四）より永祿三年（一五六〇）に至る百一十六年間の足利家に関する産事を安芸氏が書きのこした記録で、三巻が現存する。その全文は塙保己一の『群書類従』二十三輯におさめられているが、その内容の対比については後日にゆずりたい。

記録は六代將軍義教の嫡男義勝（七代將軍）の誕生に始まり十三代將軍義輝の誕生までで、足利家系図の中で八人（うち將軍職ついたもの五人—義勝^⑦、義政^⑧、義尚^⑨、義植^⑩、義輝^⑪）の名をみることができ、この時代における御産所の由来、將軍家と近習との関係、出産に関する儀式やその際に用いる調度の詳細など、室町時代の政治史、生活文化史を究める上で非常に興味のある資料であるが、御産所医師安芸氏の手で記されたものとしては、出産についての医学的記載が全くないのが残念といわねばならない。この百二十六年間は安芸家三代守家から九代貞種までに当る。

四、天保飢饉における三条河原救小屋について

一部で渡辺華山の作と伝えられる「荒蕨流民救恤図」（十一図）にそえられた略記に、華山の署名で「天保八年

（一八三七）二月、京の教諭所儒師北小路大学助が同志をつのり、小屋をかけて飢餓の流民に衣食医薬を与えた」と記されている。この大学助が十六代貞一（さかえ龍）であり、儒医としてつとに京師で高名であった。貞一は天保八年には七十三歳、すでに従四位上の高位にあり、その年齢を感じさせないボランティア精神とバイタリティには、まさに驚嘆すべきものがある。

当家に現存する「荒蕨流民救恤図」は、明治三十二年に原図の所蔵者が同学の土に配ったとされる写しの一つである。この添書には華山の手で画かれたものとあるが、華山研究家の間では、華山はこの頃江戸に在任しており、画風からみても華山の筆とは考え難いということが定説になっている。

救小屋のよみ方であるが、同図には「教諭所すくい小や」と書いた提灯が画かれている。他の文献にみられる「おたすけ小屋」というよみ方は治療を受けた窮民側のよび名であったのではないか。

(結語)

安芸守定以来、現在に至るまでの安芸家(北小路家)代々の医家としての業績の中、のこされた資料や諸家の文献から今日までに知り得たものを述べた。今回の発表はその一部にすぎず、今後更に解明に力をつくしたい。

(北小路外科医院)

日葡辞典から見た

安土桃山時代の医学

一、医療用具

亀 節子

大槻 彰

前川 久太郎

このたび岩波書店より“VOCABULARIO DA LINGUA DE IAPAM com a declaração em Portugues” (ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書)の日本語訳が刊行された。

イエズス会における日本語研究は、一五五〇年代のイルマン・シルバによる文典と辞書の編纂に始まるが、布教のための最初の準備として日本語修得に乗り出した各宣教師の個人的な研究が積み重ねられて誕生したのが、この長崎版『日葡辞典』である。時に、一六〇三年であった。

収録語総数三万二千二百九十三語に達するこの辞典は、特に西日本地域の話し言葉を中心にした中世から近世にかけての各層の日本語を反映し出した非常に貴重な資料とさ